

第 3 回

CAF賞

CONTEMPORARY
ART
FOUNDATION

現代芸術振興財団

2 0 1 6

ART AWARD



前澤 友作
YUSAKU MAEZAWA
生年月日 1975年11月22日
出身地 千葉県

1975年千葉県生まれ。早稲田実業学校卒業後、バンド活動の一環で渡米。帰国後、1998年に輸入CD・レコードのカタログ販売を手がける有限会社スタート・トゥデイを立ち上げる。2004年、ファッションを中心としたインターネットショッピングサイト「ZOZOTOWN」を開設。2012年、2月に東証一部上場(3092)。

同年11月に現代芸術振興財団を設立。現代芸術を中心としたアートコレクターであるとともに、若手アーティストの支援に力を注いでいる。

CAF賞

**CONTEMPORARY ART FOUNDATION
ART AWARD**



最優秀賞

表 良樹 Yoshiki Omote
東京藝術大学大学院

Tectonics

2015
326.0 x 326.0 x 100.0 cm
ポリエステル樹脂、油絵具、モルタル、鉄

この作品はポリタンク等の既成品を型取り、その雌型に対してポリエステル樹脂に油絵の具を混ぜた素材を積層していき、むくの状態になったらコンクリートの壇上に落下させて破壊し、その破片を壇上で再構成した作品である。

タイトルのTectonicsとは地質学用語で岩石圏の運動のことを意味する。地面の下でおこる、大きな運動や幅広い時間を身体的尺度に置き換えようと、この作品を制作した。

この作品を作ろうと思ったのは、アトリエでたまたま触れたポリタンクがきっかけである。

ポリタンクの素材であるプラスチックは石油から精製された素材であり、石油は地面の下の運動の元、長い時間をかけて作られたものである。そんなポリタンクが潜在的に持つ時間を内側に綿を重ねていくことによって、さかのぼろうと考えた。また、それを落下させて破壊することによって過去と現在が入り乱れる。また、その破片を再構成する事によって未来を形作るうと考えた。



優秀賞

大東 忍 Shinobu Daito
愛知県立芸術大学

GOLDEN TIME /dive/ 泣く木 / コンポジション -おっぱい-

2016
198.0 x 92.0 cm (each)
木材、キャンバス、パネル、木炭、パステル、油彩

「経験の価値」について。

今日、経験の着地点に変化がある。新しいメディアやsnsが浸透したことで、いつの間にか経験の目的が体験の蓄積による自らの構築でなく、体験の証拠(写真など)を他者に見せることによる存在の証明になっている。このことはなんだか寂しく感じる。でもメディアの扱い方によっては自分にとっての経験の重要度を意識的に利用し自らを形成する感覚を操作できるかもしれない。写真を現像して価値を上げるように、写真を

改めて丁寧に描き起こすことで現像する以上に写真に執着し価値を上げるという試みとして今作を制作した。また今回は私自身の経験の価値を上げる試みとして、自身が街灯をステージのスポットライトに見立ててその下で踊っているものや個人的に強い愛着を持てるものを図像に選んでいる。また同単位の壁面で見せる提示方法によって各々を平等に見せることも考えた。経験の価値を上げる、もしくは上げる試みそれ自体がより人間らしくなるきっかけになり

得ると考える。私は人間になりたい。



優秀賞

戸嶋 優多 Yuta Toshima
東京藝術大学大学院

stereotype

2015-2016
70.0-140.0 x 160.0 x 70.0 cm
3Dプリンター (ABS樹脂)

私は虚無感をテーマにアート作品を制作してきた。3DCGを使用し3Dプリンターで出力する事により、私がクリエイティブだと思いPC上で表現したモノが、曲線的で数値的な形で出力される。オリジナルはPCのデータとして存在し、3Dプリンターによって出力された形は偶像に過ぎない。出力された彼らの「個」はとても弱いもので、代わりをいくらでも出力することができる。我々の社会も、1つの集合体として「個」の力がとても弱い。映像も1秒24フレームで作られるが、1つの映像

の「個」をわざわざ見ようとはしない。私は3Dプリンターで出力された「個」たちを1つ1つ微妙に形を変えアニメーションした。3Dプリンターで出力された彼らを展示することにより、改めて「個」について考え直す。



名和晃平賞

井田 幸昌 Yukimasa Ida
東京藝術大学大学院

The end of today <1.15.2016>

2016
45.5 x 38.0 cm
パネル、白亜地、油彩

「一期一会」をテーマに今を生きる人々の肖像を描いています。この作品は、「今日」出会った人や事を、1日のうちに描ききるシリーズ作品「The end of today」の中の一枚です。



保坂健二郎賞

西村 有未 Yumi Nishimura
京都市立芸術大学大学院

1日の不安としての食卓もしくは見えない怖さとしての双頭の花

2015
145.5 x 145.6 x 5.0 cm
キャンバス、油彩

ある日、突然驚く。まさかの不合格、誰かとの別れ、知人が不幸に巻き込まれた / 巻き込んで来たり、地震も起きたりする。

そんなとき、自分と現実との認識の落差に呆然とし、思考は停止してしまう。結果、「なかった」ことになってしまうのだ。

でも、目の前には事実が直立不動の姿勢をとっている。どうしたらいいのか。ならば、現状へ自身を落とし込む為に、緩衝材を用意してみてもどうか。問題を仮構の世界へ一度置くこと。すると、距離が生まれて咀嚼し易くなり、見つめ易くなる。私

は、これを「寓意」という処理方法とみなして、絵の中で描き起こしている。心と体が生き続けるための生活の知恵として、今後も実践を試みていきたい。

今回の絵の内には、受け継がれてきたものとそれを突然変えられてしまった相反するものがある。前者は食卓であり、生きる為に必要なツールとして引用している。後者となるのが、左上の皿の中である。タイトルにもある双頭の花が盛り込まれている。これは、5年前にネットで見つけたスリーマイル島事故の影響で奇形化した花がイ

メージソースとなっている。この花を見て以来、ずっと私の中で”見えない怖さが形になったもの”、”踏襲してきた形を突如崩されたもの”の象徴として脳にこびりついている。手前の合唱している人物は、そのように皿の中から差し出されたものを咀嚼することで理解しようとしている。



岩淵貞哉賞

石原 海 Umi Ishihara
東京藝術大学

どんぞこの庭

2015
250.0 x 250.0 x 250.0 cm
DVDプレーヤー、スピーカー、プロジェクター、LED ライト、植物

「どんぞこの庭」を作るためのオーディション映像、テスト撮影で構成された映像と、映画の脚本を極度にドラマチックに朗読する音声で暗闇で重なりあう。すべては、ことが始まる前の段階の話。愛と絶望、そして目標やゴールに達成できないこと、待つという状態について。

スクリーンの周りに多数の植物を置き、庭のような場所を構成する。庭という場所を、室内ではなく、しかし完全な外部でもない、境界線に存在する場であると設定する。鑑賞者は、庭のような環

境に身を置き、「作られることのない映画」の、映像と音を体験する。

これは、なすすべもなく愛が終わるのをただ待っているという境界線、あるいは救われることをただ待っているという境界線、そして、ゴールに達成できない諦めまたは挑戦の境界線についての考察である。



山口裕美賞

森山 亜希 Aki Moriyama
東京藝術大学

Wedding Doll I

2016
130.0 x 194.0 cm
キャンバス、油彩

同性婚をテーマにウェディングドールを描きました。ここ最近の日本社会でもセクシュアルの多様化への動きが見られるようになりましたが、これまで作り上げられてきた「人は誰も異性を好きになるものだ」という世間の常識は未だ根強く、そういった風潮に合わせて、異性愛者を演じてしまう自分に惑わされそうになります。



奥村 岳史 Takeshi Okumura
名古屋芸術大学大学院

Make Arrangements

2015
162.0 x 194.0 x 4.0 cm
キャンバス、油彩

現代における記録媒体としての絵画の可能性を探っています。身の回りで絶えず変化する日常の風景をモチーフとして、写真に撮り収めたそれらを油彩画に変換しています。油絵の具を一つの物質として捉え、絵の具の粒を画面上で繋ぎ合わせながら描く事により、断片的ではなく連続的な時間の表象を試みました。



小澤 歩実 Ayumi Ozawa
多摩美術大学

too young to love
2016
162.0 x 130.0 x 4.0 cm
キャンバス、油彩

姉がヨーロッパへ留学していた時、ホリの深い西洋の人々に囲まれていると、まるで自分もホリの深い顔立ちになっているような感覚に襲われ、鏡で自分の姿を見たときに東洋のいつも通りの顔があつて愕然としたという話を聞いた。似たような感覚で、私も雑誌やテレビで当たり前のようにたくさんの美しい女性たちが目の前に溢れると、まるで自分もその美しい女性たちと同じように美しい存在に思えてくる。しかし、やはりふと我に返り鏡を見ると、普段の平凡な顔がそこにはある。

突然、改めて自分の容姿を客観的に把握せねばならない瞬間がそこにはある。



小田 香 Kaori Oda
サラエボ科学工科大学大学院

FLASH
2015
25:00
HD、Color、Stereo

サラエボからザグレブまで行く長距離列車の車窓から見える異国の景色を見ながら、なぜか懐かしい気持ちになり、ふと、じぶんの一番最初の記憶はなんだろうという疑問が湧きました。原初の記憶は共有されえるのか、集団的な記憶は存在するのか、思い出せるようで思い出すことのできない始まりの記憶を巡りたい、その先にいる大事な何か(誰か)を見つめてみたい、という思いからこの作品を制作しました。

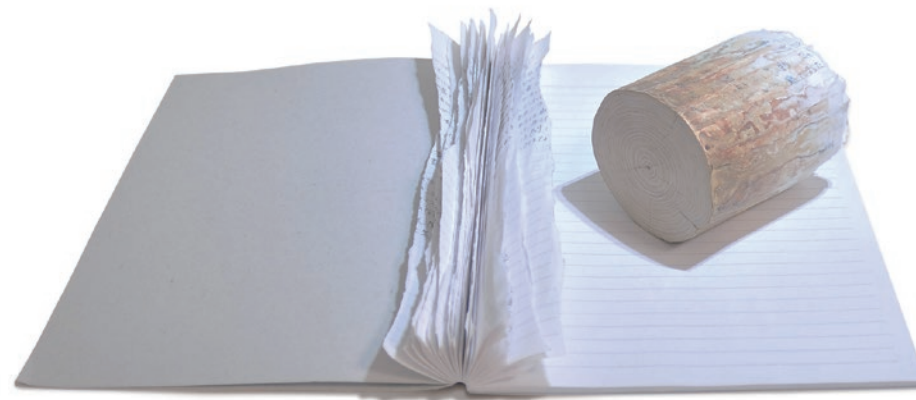


影山 萌子 Moeko Kageyama
武蔵野美術大学

白昼夢

2015
97.0 x 162.0 x 3.5 cm
キャンバス、油彩

シャワーを浴びているとき、自分の後頭部がぱっくり割れて、瀕死の男が運び出されるシーンを見ました。それは電撃のようなショックでした！無意識のうちに生まれる発想や奥底にしまわれた記憶をかきあつめてねじ曲げ、意識化したものが、無意識が生んだものに対抗できるだろうか、と考えながら一気に描き上げた実験作品です。



粕谷 優 Yu Kasuya
広島市立大学大学院

Diary

2016
7.5 x 36.4 x 25.7 cm
日記、ボンド、アクリル絵の具

5ヶ月分の作家自身の日記を木に変化させた作品です。過去の記憶が大きな時間の流れの中に埋もれていき隠されていくイメージで制作しました。



香月 美菜 Mina Katsuki
京都造形芸術大学大学院

From one stroke

2016
162.0 x 130.3 x 3.0 cm
ミクストメディア

私の作品のテーマは「絵具そのもの」だ。私は絵具を画面に配置し何かを投影する為の素材はなく、絵具そのものを見ること(または表現すること)を追求している。試行錯誤を続ける中で、画面上に行為を施せば施すほど、それが前景してしまい、絵具の存在が後景してしまうことに気付いた。そして私は「one stroke (一筆書き / 最小限の行為)」により絵画を完成させ、行為と絵具のバランスを図れるのではないかと考え今に至る。何かを見るときに自身の記憶や経験に左右されずに「そのもの」を見ることを絵具を通して実感する為に制作を続けている。



北川 裕 Hiroshi Kitagawa
京都造形芸術大学大学院

filter

2016
163.0 x 130.0 cm
アクリル絵具、パネル、綿布、木材

絵の具を糸状に固め絡め合い独立することによりキャンバスから絵画へと昇華する。浮遊することにより生まれる距離、光と影の関係からの存在の痕跡を探る。



佐々木 愛実 Manami Sasaki
武蔵野美術大学

抜け殻

2016
75.0 x 42.0 x 40.0 cm
椅子の削り片

抜け殻はあたたかい。そこに刻まれた時間や記憶の追体験、いわば「生き戻る」行為から熱は生まれる。本作品の素材は、実際に長い間使われていた椅子である。椅子には、長い年月を過ごした家族の記憶。時間や記憶は、ものの表面から内面に染み込みつつも、表面をとりまいて留まる。木を削り、時間や記憶を抽出して、再び形―抜け殻―にした。

見る人が「生き戻る」、熱を生むきっかけとなってほしい。



渋谷 剛史 Takefumi Shibuya
東北芸術工科大学大学院

The land which change

2016
167.0 x 130.0 x 3.7 cm
キャンバス、アクリル、廃材

中心街から郊外への人口流失が進むとある町を題材にした映像のスクリーンショットを数点撮る。その写真をモチーフにその町から拾った廃材をコラージュして絵を描いていく。最後にコラージュした廃材を剥がす。行為の痕跡を残しながら、新しい画面を作っていく。それを繰り返していくことでその町が時間の流れで変化していく過程を絵画で表現している。



関野 央也 Hiroya Sekino
広島市立大学

意識

2014
200.0 x 90.0 x 90.0 cm
銅、木

椅子に座るときに起こる人の無意識を表現した作品です。

人々は座るとき、意識せずして着席後の座り心地やそこから見える景色を想像しています。私はそのことを意識化するためにあえて座りにくい高さに座面を作り、座ったらどうなるのだと意識させます。それは内在している人の意識を表面化し、無意識を表現します。



高津戸 優子 Yuko Takatsudo
ドイツ・ミュンヘン芸術アカデミー

no Title

2016
65.0 x 50.0 x 1.5 cm
キャンバス、アクリル絵の具

作品を作る際には、テーマよりプロセスを大事にしています。スケッチを重ね、平面と立体(主にケラミック)を制作する事により瞬発的に出てくる有機的な形、その形から連想される色や、流れる線を描いています。ケラミックはここ半年で始めたばかりですが、粘土を触り始めてから、より素材・色・形を重要視するようになりました。色は自分で顔料から、絵の具を作っています。自分が感動した色、確信を持ってた色を使用します。私の現在の絵は、今は抽象的だと思います。それはドイツに6年間滞りし、抽象絵画クラスで

学んだ影響もあるでしょう。しかし、また数カ月後には具象的な絵に変わっているかもしれません。自身の関心にあわせ抽象も具象も関係なく、どちらも自由に動き、組み合わせ、より新しいものを作ろうとする姿勢、焦らずに経験を重ねていくことで、おのずとテーマは見つけられるのではないかと思います。

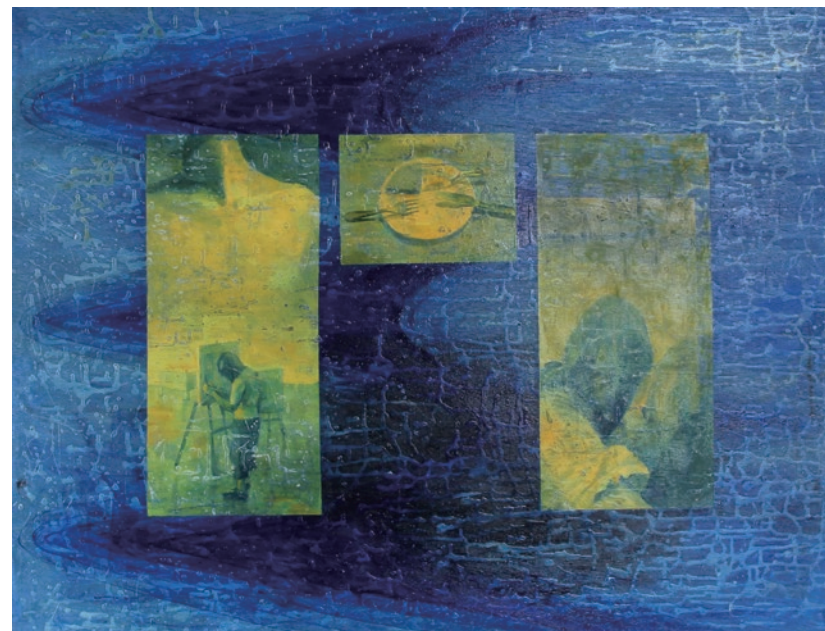


高橋 博海 Hiromi Takahashi
武蔵野美術大学

どすこーん

2015
64.0 x 37.0 x 37.0 cm
ナイロン、プラスチック

カラーコーンとは道路や工事現場などの規制や区
分けを目的として置かれる保安器具である。
本来人間が踏み越えることができない存在でな
ければならないのだが、その形状や数の多さ故か、
役割が形骸化してきているのが現状だ。カラーコー
ンとはどのような存在か、なぜに彼らはそこに立
ち続けているのか、今一度問いかけたい。



谷本 梢 Kozue Tanimoto
金沢美術工芸大学

釉薬のゆらゆら

2014
92.0 x 119.5 x 3.0 cm
油彩、樹脂

ある九谷焼の絵付けの工程をたまたま見かけました。
その色の濃淡の移ろいが美しく消え入りそうで、
ずっと頭から離れませんでした。深い色味と駆け巡
る時間の交差点に在るような感覚を表現しました。



千葉 遥 Haruka Chiba
京都市立芸術大学大学院

鷺
2015
130.3 x 130.3 x 7.0 cm
キャンバス、油彩

「鷺」は複雑な心の表情をいかにシンプルな要素で描けるかという試みをモチーフに形にしたものです。

日常や性格、喜怒哀楽など変化する心それ自体を美しいものとしてとらえています。目には見えなけれど確かにある存在、そういったものは感じる事でしか計れないと思い、絵画として表現したいと思いました。



外館 実季 Miki Todate
多摩美術大学

万化鏡 - 気持ちを映し出す鏡たち -
2015 - 2016
03:00
アニメーション

変わりゆくファッションと変わらずに受け継がれていく“自分らしくありたい”という気持ちを表現したアニメーション作品。演出としてキーアイテムになっているのが“鏡”。変化するファッションと登場人物の表情を様々な鏡で映し出し展開していく。



富安 由真 Yuma Tomiyasu
東京藝術大学大学院

Woman with a Rope (triangle)

2015
148.7 x 109.0 cm
インクジェット出力したキャンバスに油彩

蚤の市で見つけた19世紀から20世紀初頭の肖像写真をもとに描いた平面作品のシリーズ。私の中でドローイングに位置づけられるこの作品は、一度肖像写真をデジタル化してパソコンに取り込み、それを出力し印刷したものを、溶剤などで溶かしたり絵具で塗りつぶしたりすることで描かれる。本来の肖像を「消す」という動作で描くことにより、その肖像の持つ内面性や精神性をより露にすることを試みている。

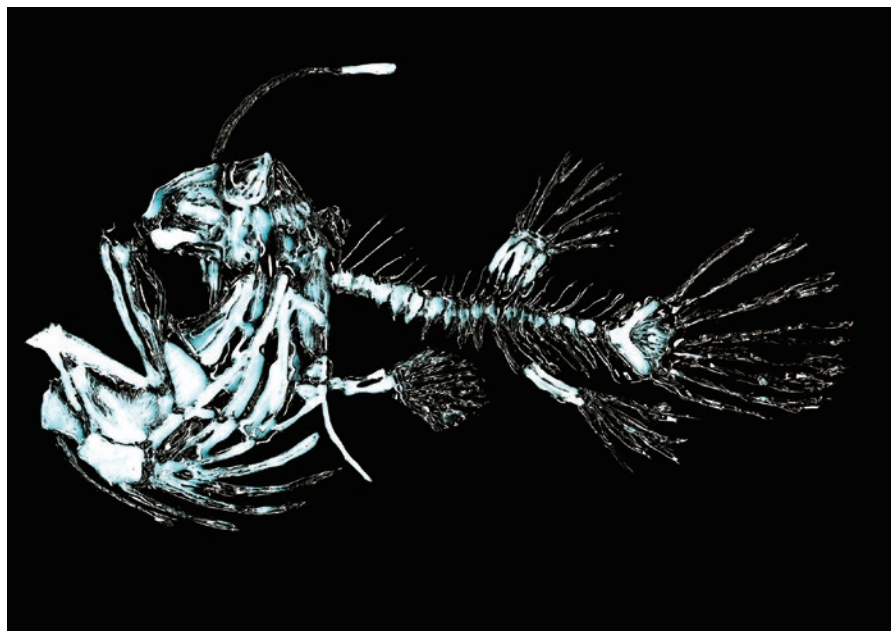


埜 康平 Kohei Hanawa
多摩美術大学大学院

夢の中なら言える

2015
109.1 x 78.8 cm
紙、ペン

モノを捉える姿勢を問いながら絵を描いていきたい。



本田 芳也 Yoshiya Honda
長岡造形大学

Face of the bone ～チョウチンアンコウ～

2016
103.0 x 145.6 cm
接着剤

「骨」というものをイメージしたときおそらく死などの負的な感情を抱くことが多いだろう。だが骨には生命にまつわる永遠や不死など負的なイメージとは違う、生(正)としてのイメージとして受け取ることもできる。そういう間逆な性質、イメージを内包した骨というものから生命の神秘性などを感じる事が出来る。その想像を増長することが可能な骨の描写表現を目指した。タイトル「Face of the bone」(骨の顔)、骨の表情という意味合いである。



宮野 かおり Kaori Miyano
多摩美術大学

help

2015
05:00-15:00
ハプニング・パフォーマンス

人が誰かを助けようとする意識はどこから来て、同じ人同士として、どのように助けようとするのだろうか。
何度も他者の危機的状況に接することにより、「help」という行動を問われる状況を作り、その場にいる全員でそれを体感するパフォーマンスを行う。



公益財団法人
現代芸術振興財団